

【目的】海洋曝露環境下における労働作業には多種多様あるが、今回はその中でも漁労作業を行っている労働者を中心に、その着用衣服の実態調査を試みた。海洋曝露環境下での作業において、漁労作業者は作業中の衣服として、実際に何をどのように着用しているのか、その実態調査の報告は皆無である。そこで本調査を試みることにより、漁労従事者の衣服に関する問題点、そして改善すべき点などを把握することにより、漁労作業者の快適な衣服設計を検討するための基礎とすることを目的とした。前回の寒冷環境下での実態に引き続き、今回は暑熱環境下での報告をする。

【方法】調査対象漁港：福岡、気仙沼。調査方法：漁業協同組合、漁労長などの聞き込み、漁労作業者のアンケート調査などによる。

【結果】遠洋底引き網漁船（福岡）の東シナ海中心の操業では、二重デッキ式底引き漁船が導入され、本船での作業者は過酷な環境作業は短時間であり、デッキ内（快適環境）での作業が多く、暑熱環境に対しての受けとめ方は深刻ではない。しかし、ごく一部にすぎず、全般的にはかなり厳しい条件下で、害虫（あぶ、蚊）からの護身用に着装し、Tシャツまたはランニングに合羽ズボンが一般的である。遠洋まぐろ船（気仙沼）赤道直下での操業で、酷暑曝露環境下での作業が長時間であるため非常に厳しい。直射日光、毒クラゲなどの護身用に、服装は長袖シャツと合羽ズボン、ゴム長靴が着装され、あせも、水虫にやられる。温熱的に重装備の傾向である。合羽は漁労作業衣として重要な役割を果たし濡れ、汚れ防止中心に用いられる。